

若い木霊

宮沢賢治

青空文庫

〔冒頭原稿数枚なし〕

「ふん。こいつらがざわざわざわ云っていたのは、ほんの昨日のようだったがなあ。大抵雪に潰されてしまったんだな。」

それから若い木霊は、明るい枯草の丘の間を歩いて行きました。

丘の窪みや皺に、一きれ二きれの消え残りの雪が、まつしろにかがやいて居ります。

木霊はそれを見ました。そのすきとおるまつさおの空で、かすかにかすかにふるえているものがありました。

「ふん。日の光がぶるぶるやってやがる。いや、日の光だけでもないぞ。風だ。いや、風だけでもないな。何かこう小さなすきとおる蜂のようなやつかな。ひばりの声のようなものかな。いや、そうでもないぞ。おかしいな。おれの胸までどきどき云いやがる。ふん。」

若い木霊はずんずん草をわたって行きました。

丘のかげに六本の柏の木が立っていました。風が来ましたのでその去年の枯れ葉はザラザラ鳴りました。

若い木霊はそつちへ行つて高く叫びました。

「おおい。まだねてるのかい。もう春だぞ、出て来いよ。おい。ねぼうだなあ、おおい。」
風がやみましたので柏の木はすっかり静まってカサツとも云いませんでした。若い木霊はその幹に一本ずつすきとおる大きな耳をつけて木の中の音を聞きました。がどの樹きもしんとして居りました。そこで

「えいねぼう。おれが来たしるしだけつけて置こう。」と云いながら柏の木の下の枯れた草穂くさほをつかんで四つだけ結び合いました。

そして又またふらふらと歩き出しました。丘はだんだん下って行って小さな窪地くぼになりました。そこはまつ黒な土があたたかにしめり湯気はふくふく春のよろこびを吐はいていました。一疋びききがえるの墓かぶがそこをのそのそ這はって居りました。若い木霊はギクツとして立ち止まりました。

それは早くもその墓かぶの語ことばを聞いたからです。

「鶉とぎの火だ。鶉とぎの火だ。もう空だつて碧あおくはないんだ。

桃色ももいろのペラペラの寒天かんてんでできているんだ。いい天気だ。

ぼかぼかするなあ。」

若い木霊の胸はどきどきして息はその底で火でも燃えているように熱くはあはあするの

でした。木霊はそつと窪地をはなれました。次の丘には栗の木があちこちかがやくやどり木のまりをつけて立っていました。

そのまりはとんぼのはねのような小さな黄色の葉から出来ていました。その葉はみんな遠くの青いそらに飛んで行きたそうでした。

若い木霊はそつちに寄つて叫びました。

「おいおい、栗の木、まだ睡つてるのか。もう春だぞ。おい、起きないか。」

栗の木は黙つてつめたたく立っていました。若い木霊はその幹にすきとおる大きな耳をあててみましたが中はしんと何の音も聞こえませんでした。

若い木霊はそこで一寸意地悪く笑つて青ぞらの下の栗の木の梢を仰いで黄金色のやどり木に云いました。

「おい。この栗の木は貴様らのおかげでもう死んでしまったようだよ。」

やどり木はきれいにかがやいて笑つて云いました。

「そんなこと云つておどそうたつて駄目ですよ。睡ってるんですよ。僕下りて行ってあなたと一緒に歩きましょうか。」

「ふん。お前のような小さなやつがおれについて歩けると思うのかい。ふん。さよならつ

「
やどり木は黄金色のベソをかいて青いそらをまぶしそうに見ながら「さよなら。」と答
えました。

若い木霊は思わず「アアアハハ」とわらいました。その声はあおぞらの滑らかな石ま
でひびいて行きましたが又それが波になって戻って来たとき木霊はドキツとしていきなり
堅く胸を押えました。

そしてふらふら次の窪地にやつて参りました。

その窪地はふくふくした苔に覆われ、所々やさしいかたくりの花が咲いていました。若
い木だまにはそのうすむらさきの立派な花はふらふらうすぐろくひらめくだけではつきり
見えませんでした。却つてそのつやつやした緑色の葉の上に次々せわしくあらわれては又
消えて行く紫色のあやしい文字を読みました。

「はるだ、はるだ、はるの日はきた、」字は一つずつ生きて息をついて、消えてはあらわ
れ、あらわれては又消えました。

「それでも、つちでも、くさのうえでもいちめんいちめん、ももいろの火がもえている。」
若い木霊ははげしく鳴る胸を弾けさせまいと堅く堅く押えながら急いで又歩き出しまし

た。

右の方の象の頭のかたちをしたかんぼく灌木の丘からだらだら下りになった低いところを一寸越しますと、又窪地がありました。

木霊はまっすぐに降りて行きました。太陽は今越えて来た丘のきらきらの枯草の向うにかかりそのななめなひかりを受けて早くも一本の桜草が咲いていました。若い木霊はからだをかめてよく見ました。まことにそれは蛙かえるのことばの鶉うずの火のようにひかつてゆらいで見えたからです。桜草はその靱しなやかな緑色の軸じくをしずかにゆすりながらひとの聞いているのも知らないで斯こうひとりごとを云っていました。

「お日さんは丘の髪の毛かみけの向うの方へ沈しずんで行ってまたのぼる。

そして沈んでまたのぼる。空はもうすっかり鶉うずの火になった。

さあ、鶉うずの火になってしまった。」

若い木霊は胸がまるで裂けるばかりに高く鳴り出しましたのでびっくりして誰たれかに聞かれまいかとあたりを見まわしました。その息は鍛冶場かじばのふいごのよう、そしてあんまり熱くて吐いても吐いても吐き切れないのでした。

その時向うの丘の上を一疋びきのとりがお日さまの光をさえぎって飛んで行きました。そし

て一寸からだをひるがえしましたのではねうらが桃色にひらめいて或いはほんとうの火がそこに燃えているのかと思われました。若い木霊の胸は酒^{アルコール}精^{アルコール}で一ぱいのようにまりました。そして高く叫びました。

「お前は鶉という鳥かい。」

鳥は

「そうさ、おれは鶉だよ。」といいながら丘の向うへかくれて見えなくなりました。若い木霊はまっしぐらに丘をかけたのぼつて鳥のあとを追いました。丘の頂上^{あし}に立って見るとお日さまは山にはいるまでまだまだ間がありました。鳥は丘のはざまの蘆^{あし}の中に落ちて行きました。若い木霊は風よりも速く丘をかけおりて蘆むらのまわりをぐるぐるまわつて叫びました。

「おおい。鶉。お前、鶉の火というものを持つてるかい。持つてるなら少しおらに分けて呉れないか。」

「ああ、やろう。しかし今、ここには持つていないよ。ついてお出^いで。」

鳥は蘆の中から飛び出して南の方へ飛んで行きました。若い木霊はそれを追いました。あちこち桜草の花がちらばっていました。そして鳥は向うの碧いそらをめがけてまるで矢

のように飛びそれから急に石ころのように落ちました。そこには桜草がいちめん咲いてその中から桃色のかげろうのような火がゆらゆらゆら燃えてのぼって居りました。そのほのおはすきとおつてあかるくほんとうに呑みたくらいでした。

若い木霊はしばらくそのまわりをぐるぐる走っていましたがとうとう

「ホウ、行くぞ。」と叫んでそのほのおの中に飛び込みました。

そして思わず眼をこすりました。そこは全くさつき墓がつぶやいたような景色でした。

ペラペラの桃色の寒天で空が張られまっ青な柔らかな草がいちめんでその処々にあや

しい赤や白のぶちぶちの大きな花が咲いていました。その向うは暗い木立で怒鳴りや叫び

ががやがや聞えて参ります。その黒い木をこの若い木霊は見たことも聞いたこともありませんでした。木霊はどきどきする胸を押えてそこらを見まわしましたが鳥はもうどこへ行

ったか見えませんでした。

「鶺鴒、鶺鴒、どこに居るんだい。火を少しお呉れ。」

「すきな位持つておいで。」と向うの暗い木立の怒鳴りの中から鶺鴒の声がしました。

「だってどこに火があるんだよ。」木霊はあたりを見まわしながら叫びました。

「そこらにあるじゃないか。持つといで。」鶺鴒が又答えました。

木霊はまた桃色のそらや草の上を見ましたがなんにも火などは見えませんでした。

「鶉、鶉、おらもう帰るよ。」

「そうかい。さよなら。えい畜生ちくしょう。スペイドの十を見損みそこなっちゃった。」と鶉が黒い森のさまざまのどなりの中から云いました。

若い木霊は帰ろうとしました。その時森の中からまっ青な顔の大きな木霊が赤い瑪瑙めのうのような眼玉をきよきよきよさせてだんだんこつちへやって参りました。若い木魂こだまは逃げて逃げて逃げました。

風のように光のように逃げました。そして丁度前の栗の木の下に来ました。お日さまはまだまだ明るくかれ草は光りました。

栗の木の梢こずえからやどり木が鋭く笑すろどって叫びました。

「ウワーイ。鶉にだまされた。ウワーイ。鶉にだまされた。」

「何云ってるんだい。小つこびゃ。ふん。おい、栗の木。起きろい。もう春だぞ。」

若い木霊は顔のほてるのをごまかして栗の木の幹にそのすきとおる大きな耳をあてました。

栗の木の幹はしいんとして何の音もありません。

「ふん、まだ、少し早いんだ。やっぱり草が青くならないとな。おい。小こびやっ、さよなら。」
若い木霊は大分西に行った太陽にひらりと一ぺんひらめいてそれからまっすぐに自分の木の方にかけて戻りました。

「さよなら。」とずうつとうしろで黄金色きんのやどり木のまりが云っていました。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

1997（平成9）年5月25日3刷

※「木霊」と「木魂」の混在は、底本通りです。

入力：土屋隆

校正：うてな

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若い木霊

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>